

日誌研究会の意味と質的心理学の方法

やまだ ようこ（京都大学）

日誌研究会の意味と質的心理学の方法

「日誌研究会と質的心理学の基礎理念」ということで基本的な考え方についてお話したいと思います。日誌研究会というのは初めて聞かれた方も多いのではないかと思います。いつからいつまでかということ自体、あまりはつきりしていなくて、始まる前に、このメンバーで話をして確認してみました。

私自身は、1970年代から子どもの日常生活での観察記録をとり始めています。1975年に長女の観察記録をもとにした論文「ある6か月児の操作的探索における新奇刺激の効果」を、日本教育心理学会の『教育心理学研究』に掲載しました（山田，1975）。まだ、日本発達心理学会がなかったころで、教心研は発達心理学関係論文を掲載できる貴重な学術誌でしたが、その後で長男の観察をまとめた論文（山田，1982）も含めて、一事例の観察が学会誌論文に載ったのは例外的なことだったと思われます。

そのころ私は大学院生で、学界の動向としては乳児の実験的研究が中心でした。長男が1977年に生まれてから、本格的に日誌観察を始めました。1978年に、日本心理学会第42回大会で長男の日誌観察をもとに、「言語発生を準備する一条件としての三項関係の形成（1）—指さし、showing、givingなどの出現経過」という発表をしました（山田，1978）。これは、世界的に有名になったTrevvarthenの第二次間主観性の観察論文と、まったく同時並行的な発表で、世界的に見ても非常に早い時期のものです。また、その後「共同注意」と言われるようになる現象を、9か月ころからの「三項関係の発達」という文脈で統合的に考察したのは非常に先駆的な知見だったと思います

が、日本では外国の研究だけが引用されるのは、とても残念なことです。

そのころは仲間がいませんでしたが、少し後、1980年代になって麻生さんとの出会いがありました。実際にはどうもきっかけは『心理学評論』に出した「言語機能の基礎」という論文（山田 1980）で、それは麻生さんの論文とたまたま一緒に掲載されたのです。それが1980年のことでした。その後で、麻生さんからラブレターがやってきて、それについてお返事したのが、どうも出会いの始まりのようです。数回のやりとりのあと、一緒に「日誌研究会」をしようとお誘いしました。そのあとで、学会で出会った綿巻さんと、秦野さん、お二人ともご自分のお子さんの記録をつけておられたので、お誘いしました。

したがって、日誌研究会の開始は、1980年代前半頃だと思います。主なメンバーは、やまだ（ようこ）、麻生（武）さん、綿巻（徹）さん、秦野（悦子）さんをコアとして、ときおり川上（清文）さん、岩立（志津夫）さんの参加もありました。あまり組織的ではなく、各自がそれぞれ自分で子どもの日誌記録をつけて、そのノートの厚い束を持ち寄って見せ合いながら議論するという、ゴーイング・マイウェイの活動でした。ただ他に発表の場もなく、仲間もいなかったもので、非常に熱い研究会でした。名もなく、貧しく、学会の主流には到底認められないようなマイナーな研究路線で、手間暇かかる割に報われないことは確かでしたが、それでも自分たちはあえてやるんだ、みたいな熱い意気に燃えていた研究会だったと思います。

その当時のコンテクスト（文脈）として、社会、歴史的なコンテクストをごく簡単に振り返ってみますと、心理学研究は、実験と調査による圧倒的な数量的・科学主義、行動主義の時代でした。私は卒論で動物実験をしながら、これで人間の心理に迫れるんだろうかという疑問をずっと持っていました。それで大学院に進学しないで、一度臨床の現場に就職して自閉症児のセラピーをしていたのですが、改めて発達心理学をやろうとところざしを立てて、大学院に入り直したところでした。

ちょうど発達心理学に非常に熱い波がやってきた時代で、乳児研究が始まって新発見が相次いでいました。1970年代後半は、急速に乳児研究が始まっ

て、今では乳児研究などあたりまえのようですが、乳児を対象に科学研究ができるということ自体が大変革でした。赤ちゃんは目が見えるんだ、赤ちゃんは生まれた時からこんなに有能だという大発見が相次いでいました。

ピアジェの影響も非常に大きかったと思います。圧倒的に巨大なグランド・セオリーがあった時代でした。ピアジェが丹念に追った乳児の観察記録、『知能の誕生』『現実の構成』『表象の発生』という三部作があります。それらはまだ翻訳されていませんでしたが、バイブルのように読みました。もともと言語発達研究では、日誌研究は古典的に重要な位置を占めていました。まだ他にも、ワロンの本や、ウェルナー&カプランの『シンボルの形成』など、共通に読んだ本がたくさんありますが、ピアジェの三部作は何といってもすごかった。毎日、毎日、子どもの観察を詳しく徹底的に記録して、それをもとに理論を構築していく学問のすごさを学びました。行動観察が徹底しているだけではなく、それをとことん理論化し説明しようとするのです。それは、それまでの現場観察で細かい行動のディテールを羅列的に出して終わる研究、あるいは理論中心で観察はつまみ食いの例示で終わる研究、そのどちらにもないすごさでした。

もう一つは学問的コンテキスト、当時の大学のおかれていた文脈があります。私たちは、団塊の世代、大学闘争の世代でもあるのですが、学問はこれでいいのかという危機感を共有していたと思います。それで、単なる大学批判や否定だけではなく、自分たちで新しい学問をつくっていこう、マイナーでもいいから創っていこうという熱いころざしがありました。研究者個人が学問とどのようにかわるかを真剣に考えるという、時代的コンテキストもあったように思います。

私は1987年に『ことばの前のことば』という本を出しました（やまだ1987）。それは、日誌研究会で日誌をこつこつ書いたものをベースにして、理論的にまとめたものです。今日は、その本をもとにして、4つほど現在と未来の質的研究につながる問題を考えてみたいと思います。『ことばの前のことば』出版当時は、心理学からはほとんど反応がなかったのですが、廣松渉先生など哲学者から大きく評価していただきました。それは、ものを考え

る基本を問い返す本だったからだと思います。

第一に、『ことばの前のことば』で問うたのは、「客観」とは何か？という問いです。これは今、質的心理学をやってらっしゃる方にとってはほとんどあたりまえのようなことなのですが、自然科学モデルではなくて人間科学モデルをつくっていきたいと考えました。特に研究者と子どもとの関係性を変えていきたいということです。

それまでは研究対象は客観的なobject（モノ）であった—客体とも言われますが。子どもは、研究対象でした。子どもは、対象じゃないんだ、モノじゃないんだ、相手は人間なんだというところから研究を始めたいということでした。

一方、いわゆる「客観的」な研究の対極には、主観的な「思いこみ」や解釈による研究がありました。objectの反対は、subjectですが、可愛い子ども、純粋な子ども、情緒的な子どもなど、研究者の方が思いこみたっぷりで子どもを見て解釈していくような主観的な研究、それも違うんじゃないかと思いました。

ですからオブジェクティヴ（客観的）でもなく、サブジェクティヴ（主観的）でもない、対話的關係性、研究者と子どもが相互に問えば応答できるような関係性の中で研究していくことを考えました。親であり、研究者であり、当事者である人間が、ひとりの子どもを大切に、丁寧に長い時間かけてつきあっていく研究姿勢が、日誌研究の基礎にありました。この考えは、今の質的心理学研究における、研究者と研究参加者との基本的な関係性のつくり方と同じではないかと思います。

第二には、生活のフィールドとコンテキストを重視していくことです。これも今ではあたりまえになっているのですが、その頃は自分が生活している場所と研究室は全く別個のものでした。日常生活のフィールド、そこからものを考えて学問にしていこうと思いました。同じ行動も別のコンテキストの中でトータルに見ていくことで、その意味がよりよくわかる。同じ行動も縦断的に追いかけていくことで、その変化プロセスがよりよくわかるということです。

第三に、私がピアジェやレヴィンなど、古典時代の質的研究者から学んだことは、記述だけで終わらない研究、単なる事例研究ではない、個性記述ではない研究のあり方でした。それは、現場の記述に根ざしながら、理論構成を行っていく研究方向です。モデル構成的現場（フィールド）心理学と呼んできました。

現場研究のなかには、有名な理論、たとえばフロイトの理論など、非常に大きなグランド・セオリーがあって、それを事例に当てはめてみる研究も多いです。それでは、理論を個別事例にあてはめて解釈するので、理論の単なる応用研究になってしまいます。生活フィールドとコンテクストを重視し、フィールド観察のていねいな記述から、モデル構成や理論化による一般化をめざしていきたいというのがモデル構成的^{フィールド}現場心理学の方向性でした。

第四に、『ことばの前のことば』の基本的な考えで、現在と未来につながる考え方として、ここで特にお話したいのは、ネットワーク・モデル（網目モデル）の提案にあります。あの本では、「ツリーモデル」から「ネットワークモデル」への移行を提唱したわけです。私は、その基本的な考え方の背景にある学問知と方法論のパラダイム変換を問い返ししながら、今はナラティヴ（語り・物語）論と関係づけて展開しています（やまだ、2006、2007）。

あれから20年以上たって、歩みはとても遅いのですが、日誌研究会のころに出したネットワークモデルを、今書いている論文（やまだ、2008）とからめて、次にお話したいと思います。

①「ツリーモデル」は、多くの人たちが今も使っているモデルです。「分割と階層モデル」と言ってもよいでしょう。これは古代ギリシャのアリストテレスの時代から西洋近代哲学まで一貫して使われてきたものです。「同一性と差異」と言うことでは圧倒的に同一性、一貫性、完結性、普遍性を求めてきたモデルです。

「基本的な操作」としては二元分割、二項対立、類型論のタイプ分けなど、カテゴリーに分類することが基本です。「質量表か」ということでは質的です。ね。「ナラティヴの定義」としては、アリストテレスの定義が代表的で、「はじめ」と「あいだ」と「終わり」が、それぞれ別の形態があるというモデル

です。

カテゴリーには、上下関係があります。二元分割と言っても、二つが平等で横並びというより、価値の上下関係があって二つに分かれる。カテゴリーに分ける時には境界の違いを明確にする。現実には混ざっているわけですが、それをどちらかに分けて、分類する操作が基本になります。神様と人間、研究者と研究対象、主観と客観など、「自己」と「他者」のカテゴリー分けというモデルで考えられてきたのがツリーモデルです。現在でも圧倒的にこういう考え方が根強く残っていると思います。ツリーモデルはカテゴリーに分けて、二つの質の違いを分けて比較することが基本操作です。ついでに言えばグランデッド・セオリーも、このような意味での質的分割と比較の操作を基本にしています。

②「リニアモデル」は、正確に言えば「リニア・プログレシブ（線形上昇系列）モデル」といいます。最近の私の仕事は、リニア・プログレシブを暗黙のうちに仮定してきた発達心理学モデルに対して、それに替わるモデルの提案をすることです（Yamada & Kato, 2006abなど）。近代科学、モダン科学の中心になってきたのが、この数量化モデルでした。つまり、連続量として、数量の増減や大小関係に還元されるような形で、ものをとらえるモデルです。先程のツリーモデルは二元分割でした。二つの質の違いを分けて比較することが基本操作です。それでは、リニアモデルがなぜ数量化になるのでしょうか。数量化するとはどういうことかと言うと、「質の分割ではなく、連続量」として見ていくこと、もう一つはそれらの数値を一方向の座標軸の中に位置づけることです。個々の差異は、連続量の中に位置づけられるので「質」の違いではなく、「量」の差になります。

「基本操作」としては関数関係、因果関係、進歩図式などで描かれます。質か量かで言えば、このモデルは数量的です。ナラティヴの定義としては、一方向的な時間系列を重視した定義があります。Tというのは時間ですが、 $T1 \rightarrow T2 \rightarrow T3$ と進んでいく時間系列を重視する物語の定義です。このモデルを図示すると、発達心理学でおなじみの関数関係モデルになるでしょう。

リニアモデルの特徴は、開始点、0点、オリジンが存在すると考えること

です。ゼロ点があるから、上昇（下降）していく、前進（後退）していくことがモデルとして描けます。そして、他の点は、二元分割ではなく無限の連続量として位置づけられるので、質の差も量の差になります。

リニアプログレス、あるいはリニアモデルは、線形でなくても、螺旋になっても、基本的に一方向の時間軸を想定して進んでいくことが特徴です。このような一方向の時間軸は、「原因」→「結果」の因果関係モデルにもなります。

発達心理学のモデルも、リニアモデルでできています。横に年齢軸をとって、縦にある種のパフォーマンスをとるという座標形式で、発達心理学の結果の多くを記述しています。

③「ネットワーク（網目）モデル」は、日誌研究をやっていた頃から提唱してきたものですが、これは網目のモデル、今は「生成的網目（ジェネレティブ・ネットワーク）」と呼んでいます。新たなものを生み出していくような網目です。別の言葉で言えばリゾーム（根茎）、数学者はラティス（格子）と言いますし、織物（テクスタイル）、有機体（オーガニック）、生態系（エコロジカル・システム）などいろんな呼び方があると思うんですが、互いの関係性が網目のようにむすびついていることが特徴です。また、モデル自体が新しいモデルを生んでいく、生成的である、生み出していくモデルであるということが重要です。

大きくみれば、近代後、ポストモダン思想とも言われますが、「同一性と差異」ということと言えば「差異と反復」を特徴にします。これはドゥルーズの言葉ですね。同一性というものを否定して、むしろ「差異化」していくプロセスを重視する。差異化していきますので時間的にも空間的にも生成、変化、移動プロセスを重視しますが、それを連続量にしていけないということですね。むしろ多次元性、多方向性、多様性への変化を生み出します。一方向ではなく、多方向性への変化を重視するのです。

「基本操作」としては、これは私の言葉ですが、「はなれる」と「むすぶ」ことが重要です。ネットワークモデルは、1987年の時にはまだはっきりしませんでした。現在はコンピュータのネットワークとかかわって「むす

ぶ」という操作は理解できるでしょう。むすぶ(結ぶ・産ぶ)ことによって、はなれていたものを新たな意味で生み出すことができます。むすびの前には、ある文脈から「はなれる」、あるいは「距離化」することが基本操作に入るのではないかと思います。質的にも量的にも、両行する、二つながら行われることが基本操作だろうと思います。

「ナラティヴの定義」としては、始めと終わりとあいだがあるという分割定義とも、一次元的な時間系列で定義していくリニア定義とも違って、私の定義ですが「二つ以上の出来事をむすびつける」という「むすび」の定義になります。ナラティヴ(物語)とは、経験を有機化し組織する編集作業のことです。行為を編集していく、経験を編集していく、出来事を編集していく、編集作業としてのむすびです。むすぶことによって新しいものが生まれてくるということです。

図式化すると、あちこちに飛び跳ねるネットワークのような図になります(やまだ 2008)。コンピュータ用語では、「むすび」をリンクと言います。単なるリンクではないかもしれませんが、すすむ方向はこっちにも行くし、上にも行くし、下にも行く。一方向ではない、その中で結節点をつくっていく、交差点のリンクをつくっていく、むすび目をつくっていく。むすんだものが「質」として意味をもつのです。また、同じものでも差異化し変化することによって別の質になる。

ツリーモデルでは、「自己」と「他者」は比較・対決されます。リニアモデルでは、自己と他者は限りなく接近していて、お互いが連続して、どこまでが自己で、どこまでが他者かわからず、他者という概念自体があまり重要ではなくなります。自他の差異は、金銭や財産の所有量、測定された能力や、評価値など、量の差に還元されます。ネットワークモデルでは、自己や他者は、物語的に、むすびによってオーガナイズされた、物語的自己や他者になりますから、どのようなライフストーリーでオーガナイズされるかが重要になります。物語は、組み替えもできるので、多様で多次元的なむすびが可能になります。

このように『ことばの前のことば』から20年、ほんとに遅々とした牛歩の^{ぎゅうほ}

歩みではありますが、新しいネットワークモデルの理論化を試みています。

今回は非常に抽象的な話ばかりで、日誌研究にあふれていた、子どもの生き生きした記録、具体的な観察例などを紹介できなくて残念でした。質的研究の基礎をしつかりと、広い視野で考えていくと、心理学だけではなく哲学的な知識とむすびつきますし、それから新しい具体的な研究とむすびつけて、新しいものの見方が開拓できるのではないかと感じています。

〈参考文献〉

- やまだようこ 1975 ある6か月児の操作的探索における新奇刺激の効果 教育心理学研究、26, 41-51.
- やまだようこ 1978 言語機能を準備する一条件としての三項関係の形成(1)—指さし、showing, givingなどの出現経過 日本心理学会第42回大会発表論文集 840-841.
- やまだようこ 1980 言語機能の基礎 心理学評論 23, 163-182.
- やまだようこ 1982 0～2歳における要求—拒否と自己の発達 教育心理学研究、30, 38-48.
- やまだようこ 1987 『ことばの前のことば』 新曜社
- やまだようこ 2006 質的心理学とナラティヴ研究の基礎概念—ナラティヴ・ターンと物語的自己心理学評論、49, 436-463.
- やまだようこ(編) 2007 『質的心理学の方法—語りをきく』 新曜社
- やまだようこ 2008 多声テキスト間の生成的対話とネットワークモデル—「対話のモデル生成法」の理論的基礎 質的心理学研究 7, 21-42 (印刷中)
- Yamada, Y. & Kato, Y. 2006a Images of circular time and spiral repetition: The generative life cycle model. Culture & Psychology, 12, 143-160.
- Yamada, Y. & Kato, Y. 2006b Directionality of development and Ryoko model: Reply to four comments. Culture & Psychology, 12, 260-272.